
空巣の風紀委員

春寝 晓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空巣の風紀委員

【Zコード】

Z4898Z

【作者名】

春寝 晓

【あらすじ】

一見なんの変哲のない町「空巣町」^{カラス}。平和でのどかで大きな問題があるでもない平凡な町だと思っていた地元が奇奇怪怪魑魅魍魎な者共が跳梁跋扈する町だと知ったのは高校に上がる前の寒い冬の事だった…。

これは常識人こと「晴智晴之」が出会い、あるいは聞いたこの町内の事件を書く物語である。

状況1　浮浪する少年？

状況1　浮浪する少年

俺こと晴智 晴^{ハルチ ハルユキ}之は夜道を歩いていた。

何をするでもなくただひたすらに歩いているだけ。目的なんてない。言うなれば散歩みたいなものだ。眠れないので散歩。夢遊病か俺は。なんて一人ツツコミを入れながら、今日も空巣町を彷徨っている。目的もなく、ただ真っ直ぐぼんやりと夜道を歩くだけ。

「そこの中学生、待ちなさい」

呼び止めた声は随分と若かった。

ゆっくりと振り返れば、黒髪の少女が街灯の明かりを背に受けて立っていた。

着ている制服は地元の私立高校の制服だ。来年になれば俺も入学するところだった。

……いや。違ったか？幼馴染のパンフで見たのだろうか？制服がカワイイとか何とか…？

この歳にしてボケとか笑えない。記憶が混乱しているぞ。しつかりしろ。俺。

「こんな時間にこんな所で何している？」

「いや…散歩です。眠れなかつたので」

「若いのに夢遊病か？大変だな」

「はあ…」

初対面の人に入れるコトをうん。まあ…そうだよね。うん。丑三つ時だしね。

気がつけば知らない場所歩いているなんて「変」以外の何者でもないからね。

「そ、君、名前と学校は? ついでに出席番号」「空巣公立東中学。3・4。晴智晴之。出席番号?は...?」「どうしたの? 覚えてないの?」「すみません。ちょっと待ってください」

なんのことだ。もう結構口にうちも経つてこるはずなのに出席番号を忘れるなんて。

今日の俺は俺らしくない。これは本当にボケ老人の症状が出ているのかもしれない。

ああ... 29? くらいだったかな~ 9だったのは覚えてる。うつすら。一桁だった。

19? 29? 39? 49? いやいやいやいや。クラスメート多いな俺。

ならならには無難に...。

「29?」

「わからないなら適当な事を言つな」

「いやいや本当ですって。29番田くらしだつたらいいなあって。後ろ過ぎず前過ぎな」

「いいなあつてお前の願望じやん」

「お姉さん。ソシ「ミミ気質ですか。苦労してるとですね」「話を摩り替えるな!」

否定はしなかった。どうやら相当苦労してこらへり。

「じゃ。次。電話番号と住所は?」

「電話番号は

で住所は空巣町4丁目

。

つて言つても親は今海外に行つていて留守ですよ

「ふうーん。そう。じゃあ中学生三年生にして夢の一人暮らし? いわね」

「そんな事ないですよ。近所の幼馴染が毎日飯作りに来たり、掃除に来たりするんで」

「そうか。いい幼馴染だな」

「まあ…悪くはないですよ」

「大切にしろよ。それじゃ」

そのお姉さんは質問した事にメモだけ取ると暗い夜道を去つていつてしまつた。

彼女がつけていた腕章には覚えがある。この土地の御三家が決めた警察とは別の自治組織。

時には暴力で、時には知略で、新しい町長と共にやつてきた犯罪者を摘発し住民の生活を護つている正義の味方。

地元定着ヒーローとして名を轟かせるカリスマ的存在だと地元の新聞で読んだと思う。

家に帰つてから確認してみようかななどと思いながら俺は帰路についたのだ。

家に帰れば当然のように明かりがついている。

また合鍵か…否、ピッキングを使って家の中に入ってきたのだろう。どうしてわかるかつて? 明らかにこじ開けた様な跡が残つていたら原因なんて確定だ。

ちょっと名探偵に慣れた気分だ。眞実はいつも一つ…なんちゃつて。

冗談はここまでにして、幼馴染が俺に対して遠慮といつものを知らないのはよく知っているというか、もう慣れっこだった。

鍵を壊されたり、窓の一部が破壊されたりして不法侵入する以外は掃除も料理も洗濯もやってくれるのでとても助かっている。幼馴染サマサマだ。けれど。合鍵は渡したはずなのだけれど… おかしい。

家に入ると案の定幼馴染がやって来た。

心配させたのだろう目にしたに隈のように見せかけたマイク が施されている。

なんて手の込んだ心配の仕様なのだろう。嫌味のつもりだろうか。

「ハレ！勝手に出て行つたら危ないって何回も行つたよねー！」

「ただいま

「おかえり！スッゴク心配したんだよー！」

黒髪黒田のショートカット。今時は滅多に診られない大和撫子である。

彼女の名前は安立彩。アダチ サヤ 学生兼陰陽師という特殊な職業を持つ幼馴染。一年前くらいに空巣市の実家に帰り、それから度々やって来る。日本政府からも超売れっ子の陰陽師であるにも関わらず、彼女はその仕事を休業してくれている。世話焼きが講じてピッキングや不法侵入という犯罪臭いことにまで発展してしまつたが、彼女自体は嫌いじゃない。

「ゴメン…気がついたらまた歩いてた

「最近多いね。悪霊の仕業かな？」

「どうだろう…わかんない」

「アタシが何とかできたらいいんだけど…今、アタシ調子悪いから

「大丈夫。彩が傍にいてくれれば俺は大丈夫だよ」

「つーもうーは、恥ずかしい事言わないでよーもう寝るー」

何が不満だったのか怒つて奥に引っ込む彩。

顔が真っ赤だつたが熱でもあるのだろうかと思ひながらも俺は自分の部屋に戻つた。

明日の朝に玄関の扉について問い合わせよりと心に決めての一一度寝に入つた。

翌朝、用意された朝食のメニューは焼きシャケとご飯とお味噌汁だった。

今日も彩のご飯は本当においしかった。席に着いて、朝食を食べながら扉の事を聞いた。

彩は少し泣ついていた様子だったが、そのうち真剣な表情で語り始めた。

「合鍵が合わなかつたのよ」

「合鍵…壊したのか？」

「何でそつうなるのかな…？理由によつては殴り飛ばしていいよね？」

何故、怒つている？

まさか…この破壊魔神。自覚がないというのか？と新聞紙が張られている玄関の扉を思う。

俺はちょっと驚いたがいつものポーカーフェイスに戻つて会話を続けた。

「いや。その気になれば窓ガラスとか扉のドアノブとか妖怪とか壁とか壊すからてつきり」

「妖怪と窓ガラスを一緒の部類にしないでくれる。……はあ。鍵が付け替えられてたの」

「そりやお前が壊せば付け替えるだろ？」

「知らない間に変わつてたの！誰かが付け替えたのよ。知らない間

に！」

「ふーん」

「ふーんじゃない！何とか言いなさいよ！不気味だとか！恐ろしい
だとか！そーいう恐怖心はないのぉ！？」

現在進行形で世話焼き行為をしている奴が何を言つのだろう。
四六時中人型の式 陰陽師が使う基本技術。紙を媒体に使う代わり
の目 で俺を365日24時間体制で全て監視。
風呂やトイレ以外には全部監視がつく。扉の鍵を替えたらいつの間
にか合鍵をつけるかピッキングをして入つてくる。
扉を開かないようにすれば窓を割つて進入してくるうえに、変な行
動をすればすぐさまやつてくるという徹底ぶり。

そのくせ何食わぬ顔で洗濯や掃除や料理をしていく彩に比べたら、
鍵が勝手に付け変わつているのなんて全然恐くない。

これを世間では「ヤンデレ」と言つて一部の人には愛でる対象らし
いが、実際はこんなに鬱陶しいんだ。みんな、騙されるんじゃない
ぞ。

「いや。全然。むしろタダで变えてくれたんだからいいんじゃない
？」

「よくない！全つ然よくないから！」

「防犯に関してならお前がやつてくれるから問題ないだろ？」

「えつ？…あ、うん。そ、そうなるかな」

「何か問題…ある？」

「ない…けど…いや。ないよね。そつだよ。私がいるんだから…」

「うん。問題ないなら放つて置けばいい。あつてもなくともお前に
は関係ないんだし」

ダンッ！

彩が思いつきり机を叩いたせいで食器がちょっと浮いた。

幸い汁物は飲んだ後だつたし、こぼれる心配のあるものはなかつた
為机は無事だ。

が、困つた。彩の額にあからさまな怒りのマークが見える。後ろの
般若の仮面も見える。

どうやらちょっとからかいすぎたらしく、よく口口口と表情を変
えるつえに怒りの沸点がよくわからない奴だ。
真実を言つただけなのに何故そんなに怒るのだ？と思ひながらも、
食事を没収される前に全て平らげて食器を運んだ。

それから怒り心頭の彼女の前で正座をして、三つ指ついて深く頭を
下げる一言。

「調子に乗つてすみませんでした」

「……今日の晩御飯抜きだからね！」

よかつた。昼飯は食べさせてもらひえるらしい。

俺はどうでもいいことに安堵しながらも、日常からすでに歪んでい
る人生をもつと歪める自体が起きるなんて予想もしていなかつた。

一度あることは二度あるとこう。

時刻は朝の11時。とっくに学校に行つているはずの時間。
授業は今頃三時間目くらいだらうか？と思ひながら俺は青空を眺
めていた。

小さい頃、幼馴染と来た事がある公園でだ。

俺の名譽の為に言つておくが、決して自分からサボるつと思つたわ
けではない。

冒頭と同じく「気がついたら」この場所にいた。サボるつと思つた
わけじやない。

大事な事だから一回言つたんだゾ。田頃から俺はサボタージュする

ような不良ではない。

最近の夜中の事といい。俺は一体どうしてしまったのだろうかと真剣に考える。

夜中に関してはいつも道で誰かに呼び止められるか歩道される為、どこに向かおうとしているのかの検討は全く付かない。

今回はその分目的地が明確だった。「気がついたら」公園のベンチに座っていた。

今までの道筋ももしかしたら口々を用指していたのかもしれないが、生憎詳しい道までは覚えていないので確認はできない。

次に、この公園に何故来ようとしていたのか？

この公園にそれほど深い思い出などはない。あつても幼馴染と遊んでいた事くらいだ。

他に思い当たる事に心当たりがない。大きな怪我もしたことがなかった。

俺に心当たりがないという事は「誰か」の心当たりはあるという事だらうか？

「誰か」こと犯人は俺に何らかの恨みを持つていて恨みを晴らす、または「目的」を実行する為に俺を口々に呼び出した。
とすれば俺の死亡フラグは確定だな。ここに来てしまった時点アウトだ。

かれこれきっと一時間くらいコロにいるが何も起きてない事から不気味さはちょっと増す。

一体犯人の狙いは何なのだろうか？

「おい」

「……………びっくりしたあー」

「全然ビックリした顔してないぞ」

突然声をかけられて驚いた。それほどまでに集中していたのだろう。

う。

見れば夜にあつたお姉さんと同じ学校の制服だった。腕には腕章をついている。

この町の自治組織の属している人だというのは一目でわかった。

男の背は俺より頭一つ分くらい大きくて、スラリと長い足がちょっとムカつく。

滅びればいいのに。

顔もそこそこのイケメンでダークブラウンの前髪を上に書き上げるようなオールバックでどこかワイルドな感じのイケメンだった。滅びればいいのに。

俺を見下ろすな。影で覆うな。ガタイしつかりしてんな。スポーツ選手かモデルかこの野郎。

早く死んで欲しい人種だと思つた。以上がこの初対面の男を現す表現である。

「こんなところで何をしている？学校はどうした？」

「そのセリフをバットでそのまま顔面直撃デットボールにしてやりますよ」

「俺は委員長に借り出されてるから仕方なくだ。で？お前は？」
「サボタージュじゃないです。「いつの間にか」こんな所にいたんですよ」

「いつの間にか」で公園に来て、コーヒーを飲むのか？」

「コレは「気がついた」後に買ったものです。疲れたので」「そうか」

男はこんなデタラメな話を聞いても平然としていた。

普通こんな話ウソだと疑うだらう。どういう神経を持ち合わせているのだ。

男の無知さ加減に呆れながらも、俺はコーヒーを飲み干してゴミ箱に投げた。

思つた以上にうまくはいって小さな満足感を得られたら、この男か

ら離れる事にした。

ここで補導されるのなんて困るつえ」彩にバレたらイロイロと面倒になる。

決して逃げるわけではない。この男の為を思つての親切心である事を忘れてはいけない。

うちのヤンデレは俺に少しでも接触してきた他人を容赦なく襲い始めるので他人とのコンタクトは本当に最小限に留めなければならぬい。

なのだが…。

「待て。まだ終わつてない

「俺は終わりました。学校に行きたいので離してもうえませんか?」「なら俺が学校まで送る。また「気がついたら」別のところに行つてしまつたらいい

「それはありがたいですが……お仕事は?」

「町の護りが俺の仕事だ。これも仕事のつむ。何なら俺が先生に何とか言ってやる

「それは助かります。俺が変な所に行きそつこなつたら止めて下さい

考へ直した。こんなイケメンは早くいなくなつてしまつた方が世のブサメンの為だ。

彩が始まってくれる事を心から願つて同行を求めれば、気のいい男はすぐに了承して歩き出した。

「俺は大神要だ。オオカミ カナメ高校二年」

「晴智晴之です。中学三年生。来年、貴方が行つてる高校を受けます」

「後輩か…気の毒に」

「学校嫌いなんですか?」

「嫌いだな。歩くだけで女子は叫ぶし、男子からは地味な嫌がらせされるうえに教師からの嫌味攻め。うんざりするな」

「改めて貴方に殺意が湧きました」

「唐突に毒舌だな」

しまった。つい本音が漏れてしまった。

後半二つはともかくとして女子に人気なの何がいけないというんだ。

俺なんて彩以外の女から声すらかけてもらつたことがない。うえにかけられないのに。

あつ。いや……この前初めて彩以外の女子と話をしたけれど。職質だつたが。

「大神先輩のところに黒くて長い髪の女子の知り合いとかいますか？」

「神坂の事か？」

「コウサカ？」

「空巣町内に住んでて知らないのか？空巣町風紀委員の委員長。神坂かぐや」

「この町は風紀委員によつて守護されてるんですね。警察は役立たずだなあ」

「役立たずつて事はないがやる気がないのは確かだな。おかげで犯罪の発生率は全国で少ない方だぞ」

「そうなんですね。世の中の事とか全然興味がないので知りませんでした」

「みたいだな。アイツの前で犯罪行為をしたら容赦なく木刀で殴り殺されるから注意するよつに」

「わあ。暴力によつて生まれる平和のなんと空しい事かー」

「同意見だが棒読みで言つても誰の心も動かせないぞ」

この町の平和が一人の学生の武力によつて保たれていた事にちょっとした不安を覚える。

大丈夫か空巣町。大丈夫か今後の日本。不安が多すぎてこれじゃ年越せないかもしない。

まあいいや。自分が住んでいる範囲、生活する範囲、見ることができる範囲で面倒事が起きなければ今この瞬間誰がボッコボコにされていようが気にする事ではない。

どうでもいい事を考えていると、携帯のバイブに気がついた。長さからしてメールみたいだ。開いてみればメールが50件ほど入っていた。

内容も差出人も全部同じ。安立彩からだ。まあそうだね。俺が先に出たはずなのにまだ学校についてないとわかれば慌てるに決まっている。

陰陽術だつて検索範囲に限界がある。今の俺はその検索範囲外に出てきているから彩はメールを送り続けている。

『今どこにいるの？返事下さい。大至急』

いらない心配をかけたようだ。とりあえず返信するとすぐに返事が返ってきた。

最近の子供は返信が早いなあと爺臭い事を思いながら文面を見る。

『隣にいる大男は誰？』

おつと。どうやらこの辺は彩の式が活動できる範囲内らしい。もう大神の事に目を付けられた。俺的にはこの男がどうなるか構わないでの当たり障りのない文章を打つて返す。

『町の風紀委員の人らしい。俺を学校まで送ってくれるそつだ』

送信。ブブツ。受信。

『ダメだよ。その人はダメ。絶対に連れてきちゃダメだよ。ハレ！』

『何で？』

送信。ブブツ。受信。

『その人は何かに憑かれてる！ハレが近寄つたら危ないし、この範囲だと私は手出しきれないよ！離れてハレ！』

「……は？」

「どうかしたのか？」

「……いいえ。何でもないです」

彩は陰陽師だからわかる何かがあるのだろう。

生憎俺には幽霊も妖怪も見えないし、出会ったこともないので確証は得られないままだが彩が日本屈指の陰陽師である事は認めている。故に妖怪や幽霊の存在は信じている。摩訶不思議な存在がこの世の中にはいるのだろうという事はわかつていた。

しかし、隣にいる男からは俺は何も感じない。本当に『何か』に憑かれているのか？

憑かれていたとして、俺に何の危険があるのだろう？

『憑かれてるって何？俺、もしかしてピンチ？』

送信。ブブツ。受信。

『今は大丈夫そうだけど、早く離れる事に越した事はないよ！離れて！早く！』

「メール打つの早いんだな」

また突然影が覆つた。大神が携帯の画面を覗いていた。

俺はつい携帯を隠した。メールの内容なんて他人に見られるほど恥ずかしいものはない。

何にしろ変な疑惑が上がった以上、警戒する事に越した事はないと思つた。

「恋人か？」

「幼馴染です。100件くらいメール来ててびっくりしました」

「それはもうストーカーの域だろ？」「

「すとーかー？何ですかソレ？別に普通ですよ。

メールの100件や200件くらい当たり前じゃないですか？

俺の方が先に家を出たのにまだ来てないって事は心配してこれくらいいメール送る事だつてありますよ」

「」の言葉に大神はあからさまに表情を歪めた。

この行為の異常差に対しても更何を驚く事があるのだろ？

まさすがに今回は心配させすぎたなあと反省していたから後で何か機嫌を直す口実を作らなければくらいしか考えていらない。

こいつの重度の世話焼き症候群の何か異常だといふのか？

「……幼馴染とやらは他には何かしてないのか？」

「他にはって？」

「家に勝手に侵入したりとか、部屋の中に盗聴器とか仕掛けたりとか」

「後者はわかりませんけど、前者は日常茶飯事…つていうか毎日ですよ。

扉の鍵付け替えてもどこか壊して入つて來るのでもう合鍵を渡す事にしています

「おかしいと思つた事は…変だと思つた事はないのか？」

「アイツの世話焼きはずつと昔からああなんですよ。俺が事故にあってからちょっと度が増したような気がしますけど…変だとか思つた事は一度もないです」

大神の顔がさつきより険しくなつた。

イケメンが怒ると迫力あるなあなどと思いながらも、俺はちょっと逃げるよう歩を進めた。

大神の顔が恐いのもあつたが、同時に不安になつた。だから逃げた。俺はおかしいなんてこれっぽっちも思つていらない事がおかしいと言われているようだと思った。

「おい。晴智」

「な、何です……か？」

俺は大神の声に釣られて後ろを振り向いたはずだった。

たつた数歩しか離れない距離で振り向けばあの大男が険しい表情をして立つてゐるはずだった。

けれど、振り返った先に大神の姿はなく夕焼けに沈む果てのない道路しかなかつた。

「大神…先輩…？」

真つ赤な夕日が周りを赤く染める。

幻覚でも幻でも白昼夢でもなく、俺はそんな空間に立つていた。

状況1 浮浪する少年？（後書き）

初めまして初投稿の春寝暁ハルネ アキラです。

オリジナル小説は初投稿なので、皆さんに楽しんでもらえたらとても嬉しいです。

更新はかなりまちまちになると思いますが精一杯頑張ります。

状況1　浮浪する少年？

状況1　浮浪する少年？

あたり一面が真っ赤だった。

それが夕日に照らされているからか、辺りに充満する卵が腐ったような匂いがする素が原因なのかはわからない。けれど、少ない判断状況から俺は変なところに迷い込んだと悟った。携帯で確認した時刻はまだ朝の11時頃だった。

夕焼け空にしても早すぎる。弁当だって食つてないのに理不尽ではないだろうか。

こんな世界に来て弁当の心配をする自分に呆れながらもとりあえず進む事にした。

「しかし……ここはドコなのだろうね。一応町内っぽいけど何か違う感じがするし」

人の気配が全くしないどころか入っ子一人通らない。

一応自分は外にいる。いくら人気がないと言つても、この場所はあまりにも静か過ぎた。

音も気配もないゴーストタウンをしばらく歩いて行くと、コンビ二の前に来た。

ガラスの向こうには誰もいないし、何もない。店員も商品も雑誌さえもない。

あつたとしてもココにある食料はあまり食べたいとは思わない。

俺が探したのは公衆電話だ。コンビニの前にある小さな公衆電話。小さな白熱灯が点滅を繰り返すボックスタイプの中に電話はあった。財布から小銭を取り出して、彩に電話をかける。他に電話をかける人間もいないし、仕方がないだろう。

プルルルル… プルルルル…

繫がつた！

これで連絡が取れればどうにかなるだろ？。

『はい… もしもし…』

「もしもし？ 彩？」

『お腹… 空いた』

「彩？」

『お腹空いた… お腹空いた… お腹空いた… お腹空いた…』

『……食べて……いーい？』

ガチャン！！

「ダメに決まつてんだろ！」

明らかに異常な環境の中、明らかに異常な電話に対しても俺はツッコミを入れた。

ダメだ。この電話は使えない。あれは冥府への公衆電話な感じがす

る。

ソレを思つと恐くて電話ボックスにはもつと入れない。後ろにベチャとかグチャとかしたものがいたら悲鳴は上げないがきっと氣絶するだろう。

「慢じやないが俺はグロ系は無理だ。ホラーなら大丈夫だけグロいのは無理！」

どうしよう。かなりヤバいところに迷い込んでしまった気がする。俺は力バンを両腕で抱いて、恐怖を抑えようとするがあまり意味はない。

「ついツツコミを入れてしまつた…俺もあのお姉さんの事言えないな」

何て暢気な事を言つたが、現状は変わらない。

携帯も通じない。公衆電話は冥府へと繋がっている気がする。大神とも離れた。

さあ。この状況をどうやって切り抜けようと考へながらも足は止まらない。

今はとにかく「人間」に会いたかった。

またしばらく歩き続けるがやはりどこまで行つても人影一つ見当たらない。

どこまで行つても住宅地、赤い夕日、電柱などに映る影、影、影の無限ループ。

ちょっと絶望しそうだ。頼む。誰か誰かいいか？

「……も、もしもーし」

耐え切れずに誰もいない町に向かつて、小さな声で呟いた。
大きな声でこれを街中で言つのはちょっと勇気がいる。そんな勇気は俺ではない。

小心者と笑うがいいや。お前達に俺と同じ状況に立つて同じ事がで
きるならなー?」

「はあーー」「えっ…。今のどいじー?」「ゴコロだよ。ゴコロ箱の中」「ゴコロ箱?」

かくれんぼでもしているのだろうか?聞こえたのは小さな子供の
声だった。

ある団地の外側にあつたダストボックス。蓋を開けば確かに声の主
はいた。

可愛らしい顔をした女の子だった。年頃的には幼稚園児くらいの子
供だった。
「だった」というのは少女の首から下はずつかりなくなっているの
にも関わらず、少女はゴコロ箱の中で笑っていたからだ。

「…………」
「お兄ちゃん。見つけてくれて有難うー」
「どう…いたしまして」
「あつ。でももう一つお願いがあるの」
「何?」
「身体を探して欲しいの。きっとどこかを彷徨つてると想つんだけ
ど」
「…………へえ。そつかあ。この世界は肉体と頭が離れても彷徨えちゃ
う世界なんだ」
「異世^{コトヨ}だもの。当然だわ」

異世。それがこの世界の名前。

イロイロ狂った何かが蠢く世界の名前。

誰がそう名付けたかは知らないが言いネーミングセンスをしていると思う。

俺は首だけ少女にお別れを言ひ静かに蓋を閉めて、ゴミ箱から走つて逃げた。

身体探してつて言われたけど無理に決まつてんじゃん！つていうか何で首チヨンパされて堂々としていられるわけ！？意味わかんない！…むしろソレが当たり前つてどういつ世界なんだマジで！？

頭が混乱する。どうすればいいのかわからず目的地もなくただ我武者羅に走り続ける。

とにかく走つた。風のように。疾風のじとく。真っ直ぐ真っ直ぐ一直線に。夕日が傾く道を走る。

どこまでも、どこまでも、どこまでも同じ景色が流れる気がしたが道に終わりは一行に来ない。

もしかしたらずっとこのまま夕日が傾く道に取り残されて一生を過ごすのだろうか。

「そんなん…嫌だ！俺は帰る！帰りたいんだあ…！」

誰もいない無音の町で一人の少年の叫びが木霊した。

俺は疲れ果てて道端に座つていた。

ああ。ダメだ。なんて名前だつたか忘れたけど犬…俺はもう一步も歩けないよ。

せめて最後に彩の弁当が食べて、家でダラダラして、ベッドの上で死にたかった。

大往生は憧れだ。自宅の布団の上で死ねるなんて最高じゃないか。まつ。こんな異世界では関係のない話だ。俺は道端に蹲り、さつきの少女のように首と胴がお別れした状態でゴミ箱に放置される運

命なのだろう。

大きな溜息をつきながら道端に蹲る俺は、なるべくスペースを取らないよう座り込んだ。

その時…。

「ねえ。貴方…大丈夫?」

「ふへ?」

「あらあら…酷い顔。一いつ瞬しやー」

声をかけてきたのは40代くらいの女性だった。

優しそうな面持ちで俺の手を引く。不思議と恐いという感覚はしなかつた。

何でだろ?俺の感覚が麻痺して来たとか?これが天からのお迎えとか?

ああー……事故のショックか母さんの思い出つてあんまりないからよくわかんないんだけど、母さんがいたらあんな感じなのかな?

俺は手を引かれて、公園にたどり着いた。

公園はさつき俺がいた公園だった。家の塀ばかりだと思つていたがちゃんと公園はあった。

女性は公園の水道でハンカチをぬらすと俺の酷い顔を拭いてくれた。

「あ、あの…」

「何?」

「すみません…」迷惑かけて。有難うございました

「いいのよ。それよりどうしてこんな場所に?」は人が来るような場所ではないわ

「やつぱり…そなんですね。でも出口わからなくて…」

「簡単よ。帰りたいって思つたらここからは出られるの。もうこの空間だから落ち着いて心の整理をしなさい」

「帰りたいと思つたら…出られる?」

では今まで出られなかつたのは帰りたいと思ひ氣持ちが足りなかつたから?

それとも俺自身が帰りたくないと心のどこかで望んでいたからか? そうだ。あの時俺は、大神に変なことを訪ねられてここにいたくないと思つた。

大神とこれ以上話したくなかった。だから…俺は…。

「この世界に引き込まれた?」

「心当たりがあつたようね。ならもう出られるわ。大丈夫。誰に何を言われても貴方が貴方であることは変わりないのでから。自信を持ちなさい」

「……はい。有難うござります」

「もう大丈夫? しつかり歩けるかしら?」

「はい。歩けます」

「ならいいの。頑張つてね」

俺が大丈夫だと言つたのに安心したような表情を浮かべて彼女は俺から離れていく。

「ちょっと…危ないですよ! 貴方も一緒に…」

俺は手を伸ばす。この世界に来て優しくしてくれた彼女に触れようとした手を伸ばしたはずだった。
しかし、手は何もつかめない。何も触れられずに彼女の身体を通過して彼女は消えてしまった。

まるで初めから誰もいなかつたように消えてしまった彼女。アレは俺が見た妄想の産物なのか、はたまた狂つた世界の住民だったのかは定かではないが気を取り直す事にした。

シャ　　口

気持ちを新たに駆け出したいと思つた。
こんなところで死にたくない。死ぬんだつたらベッドの上か布団の上での大往生だ。

シャ　　口

後ろに聞こえる不気味な音は無視して進もう。

ただし足は早足だ。競歩に近い速度で風のように…。
ヒュッ！という何かの音と共に俺の隣に大きな鋏が刺さつた。

「な…んだつてんだよ…チクショ…！…」

俺は全速力で走り出した。

後ろからは俺を追つてくる足音。ヒタヒタという音から相手は素足だ。

一瞬しかみなかつたのでわからなかつたがあの鋏はやひつと思えば人の首くらい簡単に切れた。

理解した。アレが少女の首を切つた凶器であると悟つた。

それをやつた犯人が後ろから俺を追いかけてきてる。

逃げなければ冗談抜きで死ぬ。あれ？もしかしてさつきのおばさんはこれがわかつて俺より先に逃げた？

まさか！あんなに優しくしてくれたおばさんがそんな事するはずないじやないか…！

いや、でも…可能性が完全に否定できないのが何か悲しい。

人間つてかくも薄情な生き物だつたのだと、今するべきではない人生の心理を一つ習得したところで足を何かに掴まれた。

俺はそのまま地面に激突。それはもう漫画のよつて顔面を地面に強打した。

痛む顔面を押さえながら俺の脚を掴んだモノを見て、絶句し後悔した。

「ソレ」もまた人間だった。「だつた」というのは前と同じような意味だが、今回は逆だった。

歳はさつき出会った少女と同じくらいの年頃なのだが、今回は少年だった。

ただ少年には顔が判別できる頭が付いておらず、胴体だけ。しかも、沼地から上がってきたようにドロドロになつた身体で俺の脚にしがみ付いていた。

昔見ていた ケモンに出てくるヘドロに抱きつかれるとしたらこんな感じかと思ったが、右足にへばりつく微妙に生暖かい少年（身体のみ）は俺の脚を地面にどつぶり嵌るように縫い付けた為、押しても退いても足は抜けなかつた。

そんな事をしていると右腕にも違和感を感じた。恐る恐る振り向けば次は少女の身体。

これはさつきの女の子のもののかな？と思つたが俺は捕まる前に振り払う。

そのうち数が増えてドロドロになつた頭のない子供たちが俺の身体を覆つて固める。

自由が利かない。逃げられない。そのうち素足の人物の姿も見えた。

「ハ、ハハ…ハハハハ…何だよ。ココには赤の女王様でもいんのかよ」

俺の身長くらいあるう大きな鍔を持つた人物は大神以上の大男だった。

大柄のガタイを覆うのは真っ赤にそまつたコート。元の色が何なのか区別なんて付かない。

そして、案の定男の肩から上は存在しなかつた。彼は、彼もまた「

「首なし」だつたのである。

『顔ヨコセ俺ノ首イ』

「無理だつて。俺死んじやうじやん」

首。首。首。首。首。首。首。首。首。首。首。首。首。

首
首
首
首

首ノトニ

卷之三

東京田口

マニア

『帝リタイ

『オウチ一ヵエシテ』

『首ヲヨロセ。』『首ヲヨロセ。』『首ヲヨロセ。』『首ヲヨロセ。』『首ヲヨロセ。』

首ラヨコセ

首はない。声を発するべき声帯もないのに声が聞こえた。

野太い男の声とたたかひたいと願ひ、子供の声が聞こえた
首を取られ、真つ暗闇の中、それで生家に帰りた。」

帰りたかつた子供たちの声が、心が、捕まえられている腕や足を通して伝わってきた。

こめんなさい 俺には何も出来ないんで

んで
す。

「ごめんなさい。家族の下に帰りたい気持ちは俺にもよくわかるよ。こんな男に協力してるのも多分お前達の意思じゃないんだよな。」
帰りたいから、家族の所に帰りたいからやりたくない事をしてるん

『ゴメンナサイ。ゴメンナサイ。帰リタイノ。パパトママノ所一帰

リタイノ『

『ダカラ…』

『『『『首ヲチョウウダイ』』』』

止めてくれ。そういうの。つい頷いてしまいそうになるから。

かといって俺に逃げる術はない。ガツチリ固まって逃げられない俺の首に銀色で刃が赤く染まつた鋏が添えられる。

「ゴメン。彩。布団で大往生の夢は叶いそうにないし、昼飯も一緒にできそうにない。

お前がヤンデレ属性なのは知っているが、くれぐれも後を追いかけ

てこないで欲しい。

あの世までお前のお人好しされるのはいくらなんでも罪悪感がハン

パン。

きつと届いていない遺言を頭の中でプレイしていったその時…。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ
ツ！！

俺の周りに火花が飛んだ。

首も固定されているので周りは見渡せないが、撃たれたのは明らかに銃だつた。

銃声が終わつた後、入れ違いに黒い影が現れた。

腰に二本の漆黒の太刀を収め、そのうちの一本を以つてして大男と対峙している少女。

それなりに距離が離れていたであろうところから、一瞬で距離を詰めて男の懷に入り込んだ。

俺の腹を思いつきり踏んで。

「はあい。魔法少女デス！」

白銀に煌く太刀の刃が大男を切り割いた。

「ゴフッ！」

俺はうめき声を上げた。突然、腹に圧し掛かつた重力によつて…

そんな事を気にせず、少女は、自称魔法少女は、男に切りかかつて
いった。

斜め上からの袈裟切り。刃は確実に男の心臓を斬つた。

男はそのまま地面に倒れ込む。それを見越した魔法少女はまだ太
刀を振り上げて、男の死体を滅多刺しにしまくつた。

「ゲホッ…ゲホッ…！」

「大丈夫ですか？手をどうぞ」

駆け寄ってきたのはオレンジ色のような髪色をした青年だつた。
年齢的には大神と近い。とても物腰が穏やかな青年は俺の手を取つ
て起してくれた。

いい人そうだと思う。子供なんかは進んで近寄つて来るだろう。
片手にサブマシンガンなんて持つていなかつたらの話だが。

「あ、有難う…」「jやります」

「どういたしまして。俺は御剣鍊彌ミツルギ レンヤ。君の名前は？」

「晴智…晴之…あの」

「何ですか？」

「柄の事…お聞きします…けど…人間で…いいんですね？」

「はい。僕達は正真正銘人間ですよ。辛かつたでしょう？もう大丈
夫ですからね」

俺の頭を優しく撫でる鍊弥の手にちょっと泣きそうになつた。

ちゃんと人間の暖かさを持った手だった。それが嬉しくて泣きそうになる。

恥ずかしいからそんな事は絶対にしないが、今はその手の暖かさを感じていたくて鍊弥の手を握つた。

「つたく…何で情報が入つて来ないんだよ。

欠缺た死体が出た時は知らせろってハゲ医院長には耳タコできるほど言つたのに…！」

「ちょっと我慢を言わせてもらつなら怒りに任せて男の死体を滅多切りにする彼女の声や肉を切り裂く音がしなければもつとよかつた。やがて満足したのか、彼女は戻ってきた。

顔に飛んだ返り血を袖口でふき取り、俺を睨みつける。

「僕は、ミツルギ御劍シノブ忍。君は僕達『鴉』が保護する。拒否する事は許さない」

「『鴉』？」

「覚えていなくていいですよ。ココに出て記憶処理を受けたら忘れてしまう事ですから」

「は？何？記憶処理って…何？」

「いいから。コレ付けて。黙つて僕達に着いてくれないかな？」

「この後、病院の医院長シメて来ないといけないから。早くしてくれる？ノロマ」

渡されたのは銀色のアクセサリー。チーンで出来た腕輪だった。先に変わった形の飾りがついているが言われたとおりにつけるとなり安心感が出て来る。

何かのお守りなのだろうか。いや。そんな事よりもだ。

「あの……御剣さん？」

「「何？」」

「……すみません。鍊弥さんの方です」

「チツ。紛らわしい真似すんじゃねえよ」

「どうかしましたか？」

「いえ。その……もうあの首なし鍔は出でこないんですね？」

俺達は助かったのか？と暗に聞いたつもりだった。

その質問に対しても鍊弥は微妙な表情をする。まことに苦笑と言つたような表情だ。

「残念ながら……しばらくしたらまた復活するでしょう」

「マジ？」

「ああいつのは早く滅してしまいたいのは山々なんですが……恨みが深いまま強制的に滅してしまったら浄化にかなりの時間を食うんです」

「それって……魂の浄化的な奴ですか？」

「そうです。なのであいつのは封印してしまつか、時間はちょっとかかりますが恨みを解消させるという方法を取らないといけないんです」

「じゃあ封印すれば良くないですか？」

「だったら君がなればいいんじゃない？君が、アレを封印するための人柱になれば万事全てはうまくいくけれど死にたいの？」

「……ごめんなさい」

自称魔法少女こと御剣忍には頭が上がらないと思つた。

つまりは二人はあの男を無事に成仏させる為に男の首を捜していた。彼を納得させる為、自分の失くした部位を、欠けた部位を見つけ出す為に探していた。

それは元の世界のどこかに落ちていて、彼らはそれを探す為に行動していたといつ。

「それで…どうして俺を？」

「たまたまだ。僕達がたまたま異世に入つて見つけたのがお前。ただそれだけだ」

「たまにいるんですよ。」「ううつ「存在するだけ」の空間に迷い込んだじやう人。

この世界は何の目的もなく、ただあの男が首を刈る為だけに生まれた世界。

俺達が「」に来たのも首を見つけるヒントがあるかもしれないっていう思いつきだけですか」

「存在するだけの世界？」

「細かい事聞いたってわかんないと思つから」これ以上の説明は却下する。

以後、許可なく口を開いたらその首を刎ね飛ばすから注意するようだ。以上

「（なんて横暴な…）」

「忍ちゃんカツコイイツ！もつと言つて下さい！」

「当然だろ。兄貴」

「（なんて残念な…）」

顔を赤らめて妙な動きをしながら妹（仮）を賞賛し続ける兄（仮）に失望した。

さつきまでの優しそうなお兄さんはパソコンでMだった。

でもって、カツコよく俺を助けてくれた少女は魔法少女でSだった。そんなやり取りに溜息をついたら肩の力が少し抜けた。

ちゃんとした人間のやり取りを見てここまで安堵したのは初めてだ。人間一度は体験すべきだろ？」「ううつ小さなことを俺は大事にしていこう。

そんな思いを胸に抱きSMプレイチックな会話を聞きながらも、異界から出ようとした時だった。

「鍊弥さん？忍さん？」

二人の動きが止まつた。

一人の影から一人が見ているモノを見た時、俺の動きもまた止まつた。

『首…ヨコセ』

さつきの奴が立ちはだかっていた。

状況1　浮浪する少年？（後書き）

一話です。遅くなつて申し訳ないです。
プロト通りなら兄妹はもつちよつと後だつたんできど予定を変更
しました。

誤字脱字報告や感想をお待ちしております。

状況1 浮浪する少年？

状況1 浮浪する少年？

「首」のない男がそこにいた。

大きな鍔を持つて、夕日に背を向けて俺達の前に立っていた。
ここまで一本道だ。割り込める場所なんてありはしないのにどうして男が目の前に立っているのだろう。

そんな事を考えていると練弥と忍は御互いの武器を持った。

「兄貴はそいつを頼む。アレは僕がひき付ける」

「でも、忍ちゃん一人じゃ……」

「チャームもあるし、じぱりくは大丈夫。適当に始末したら別ルートから現世に出る」

「できるのか？」

「「できる」「できない」じゃなくて「やる」の。僕だってこんな所で死ぬわけには行かない。」

つていうか素人がふざけた事言つならアイツに首やるから」

「……イエス、マム」

「忍ちゃんを一人になんて……そんな……」

練弥はかなり悩んでいるようだ。

ちょっと見ただけでも忍を物凄く大事にしているのがわかる。

だからこそ、こんな世界に最愛の妹を置いていきたくないのだろう。
俺だって嫌というほどこの世界の異常を体験し続けている。こんな所に彩や両親が迷い込んでしまったらとすると。

俺なら意地でも連れて帰る。彩が何と言おうと絶対手を引いて帰る。
そんな気持ちを今彼も思っている。ちょっと言動に難ありだが……い人という認識は変わらなかつた。

「そんな羨まつ……危ない事をさせるなんてー！」

「おい」

「羨まつ」って何だ。羨ましいって。

この状況が？それとも妹と一人つきりでいられる事か？

「はあ…兄貴の頭の中で僕はどうなつているんだろう？」

「もちろんー口では言えない感じにー！」

「アンタ最低だー！」

俺の口は反射的にツツコミを入れた。

ダメだ。この人。常識人だと思つたらムツツリシスコンだつた。いや、これはオープンなのか？異常な状況の中で自分の欲求を素直に暴露する事ができる彼はある意味オープンなのかもしれない。

「だつて！あのハサミで制服とかボロボロにされちゃつたりとかしたりとか！」

さつきのベツチョリでエロい事されたりとかしちゃつたらどうするんですかー？」

「この非常時になんて事言つてんだー！」

「では君はうちのカワイイ忍ちゃんのチラヒロを見て興奮しないとでも言つんですかー？」

「ソレとコレとは別問題だー俺はそれを安全地帯で見ていたいー！」

忍のスタイルは抜群によかつた。制服はこじらじや見ないのでわからないが出る所は出ているし、まな板な彩の胸よりもかなりある。大きすぎず小さすぎずの調度いい俺好みのサイズだ。顔もかなりいい。モデルのようだ。

そんな美女のエロシーンが見られるのなら堪能したいに決まつてい

る。

が、それは安全地帯での話。もしくはトレーニングなどの画面の前など
がよかつた。

あつ。いけね。家で見ると彩に殺されるわ。希望を変えよ。

「安全地帯で生で見たいです！」

「でしょうー？」

「……このバカはいつまでやつてこるつもりなのかな？」

「バカな事はありませんー」としてもレアで貴重なチラエロシーンの
撮影についてです！」

「そんなシーンは絶対に来ないから安心していいって」

「来る事に期待した男の気持ちがお前にはわからないのかー？」

「むしろ非常時に後ろを見てそんな事を言つていられる余裕がある
お前達を見て呆れるべきか感心するべきかといつ気持ちで悩むけど
な」

「後ろ？」

振り返った事に俺は後悔した。

これから俺達が行こうとしていた退路から這い出している小さな手。
ほの暗い沼っぽいところの底からわっしきの奴等が這い出してきて
た。

あつ。ヤバイ。バカやりすぎた。

「ヘルプです。鍊弥さん

「ええー！」

「わかります。気持ちは凄くそんな感じですけど…俺恐いです。身
の安全は確保したいんです」

「仕方ない。…………おにーちゃん

「はあーーー何ですか？忍ちゃん

「

驚きの変わり身の早さだった。
どつちがって?どつちもだ。

「僕、今からスッゴク頑張りたいんだけどー。お兄ちゃんに血生臭いところ見られたくないの」

「お兄ちゃんはそんな事気にしないよー」

「僕が嫌なの。だからだから、その雑魚を連れて先に戻つてお風呂の用意しといて欲しいんだ。ダメ?」

「わかったよん!先に言つてお風呂と食後のアイスの準備もしくくよー」

「わあーーー!お兄ちゃんだーい好き それじゃ回れ右してGOー!
「はあーーー!」

物凄く嬉々とした笑顔で俺の首根っこを引っつかんだ鍊弥は人形が群がる前の道路を駆けて行つた。

兄の変わり身はきっと素だろう。シスコンの名は伊達ではなかつたが忍の妹演技の技もなかなかのものだった。

それにちょっと胸を打たれてしまつた自分は変態ではないと信じたい。

今はとりあえず…。

「れ、鍊弥…さん…苦しい」

首元の部分を引っつかまれて、俺は息が出来なくなつていた。

鍊弥の後をついていくような感じで夕暮の道を走り抜ける。

その途中、鍊弥がハンドガンで何発か胴体を撃ち殺しながらだが、

さつきより数は随分と減つていて。

出口までどれくらいあるのか全く予想がつかないが、彼といれば当面の安全は心配ないだろうと判断した。

それにしても普段着のような軽装備のどこに銃器を仕舞っているのだろうというよりもいい事を考えていた。

「随分と余裕が出てきましたね。迷い込んだにしても、来ちゃったにしても上出来です」

「他にもこういうのってあるんですか？」

「ありますよ。この世界、異世は異常でしょ？だから、迷い込んだ人も来ちゃった人も大抵精神の方がイッちゃってる人が多いんですよ」

「わあ……それは大変だ」

発狂したり、精神異常者を元の場所に連れて帰らなくてはならないというのは相当な苦労だろう。

場合によっては反抗し、襲い掛かつてくる可能性だってある。今回のような防衛の事もあるが、一人が剣術などを心得ている理由がよくわかった気がした。

そういうのから比べれば俺は比較的楽な救助者なのだろう。

「二人はどうしてこんな仕事を？」

「御剣家の勤めです。俺達『鴉』は異世を封じたり、さつきみたいな化け物が人に害をなす前に片付ける。

それが、僕達に与えられた役目です。人命救助はあくまで見つけられたら……ですね」

ほとんど手遅れというのが多いのですが……と練弥は少し困った顔をした。

まあ。確かにそうなのだろう。俺だってあのおばさんがないなかつた

らヤバかった。

それを救助してくれるのだといつのだから「記憶処理」というのも
その一環なのだろう。

誰だつてこんな場所覚えていたくはないし、入りたくないと思つ。

「先祖代々の仕事って奴ですか?」

「まあ…。そんなところです」

「へえ。じゃあご両親もそんな仕事を?」

「どちらも行方不明なんでわかりません」

地雷を踏んだ。俺のバカ。

話題を変えなければと思考を切り替える。

「すみません。…お仕事とかはこれで稼いでるとか?」

「いえ。コレに報酬は出ませんよ。政治的にも非公式ですし、今
新しい町長さんも知らないと思いますよ。

主な収入源は神社の仕事と……………ちょっと危ない貿易業?」

「……………それって白い粉的な」

「いえいえ! そんなものは全然…まあチャカとかハジキとか良く切
れる包丁とか。そういう台所用品ですよ」

輝かしい笑顔で鍊弥は言った。

その「台所用品」というのは何を調理するものなのだろうとか。
チャカ? ハジキ? どこかで聞いたことがある専門用語ですねとか。
ツツコミ所が多すぎたけれど俺は頑張つて口を閉じた。きっとツツ
こんだら最後俺の命は風前の灯だ。

どうやらこれも(俺にとっての) 地雷だったらしい。どんだけ話
辛い兄妹だこいつら! -

「すみません」

「いえ。お気になさらず。晴智君の『』両親は？」

「俺の両親は海外に赴任中……らしいんです。俺、最近交通事故に会つたらしくてその辺の記憶が曖昧で」

「交通事故？記憶喪失になるほど酷いものだったのですか？」

「事件の事は思い出さないほうがいいって彩…幼馴染が教えてくれないんです。」

気がついたら幼馴染の家の布団で寝てて……幼馴染が馬乗りになつていました」

王子様は目覚めのキスで目覚めるのだと訳のわからないことを言つて馬乗りになつていた彼女を一瞬のスキをついて関節技「グラを決めたのは記憶に新しい。

「何ですか。その男に嬉しいラブコメイベント」

「違います。法に背く性犯罪です」

「いいじゃないですか。安立さん。カワイイですよ。ちょっと痴女入つてますけど」

「知つてるんですか？」

「お得意様ですから」

これは問い合わせなくてはならない。

逃亡中ながらも俺は鍊弥の手を取りこっちは顔を向かせ、両肩をガツチリガードした。

今の形相はきっと凄まじいものがある。小学生くらいなら泣かせる事だつて可能だらう。

でも仕方がない。何故なら俺の命と貞操がかかつているのだから。

「何を買つたのか教えてもらえませんか？」

「守秘義務があるので詳しい事は。大丈夫です。危ないものじやありません」

「何を根拠に大丈夫だと…？つていうか痴女だつてわかつて何故危険な物を売る！」

「商売ですか。その結果、どこの誰かがどうなるかとぶつちやけ知つたこつちやないつていうか？」

「この外道！」

「さじつこうの褒め言葉。有難うござります」

「チクショー！通じねえ！」

通じない上に救いようがない。

どうやら見誤つていたようだ。こいつはMなんかじゃない。腹黒いんだ。

Mの演技はしかりやいるが喜んじやしない。地雷踏んだだけ踏み返してきやがつた。

何でわかるか？こいつの笑顔が喜んでいるように見えないどこのか、顔に書いてあるもの。

「おととこきやがれ」つて……わすがちょっと危ない貿易業してるのであるわなあ！！

「まあまあ。落ち着いて」

「これが落ち着いていられるかあ…」

「大丈夫ですって。彼女がウチから買つたのは退魔道具ですから」

「退魔道具？」

「うちはそういうの「も」…「や。違いますね。そういうの「を」を作る工場なんです。」

「…」

こういう事件に当たつている日本全国や世界中の退魔師、陰陽師、悪魔祓い達の商会から注文を受けて届けに行きます。

例えば俺の銃や忍ちゃんの刀みたいな、怪異にダメージを与える武器の製造を行うのが「御剣神社」の存在理由なんです。

その関係で武器や装備品を降ろすのに裏…ちょっとコワモテな感じ様達との付き合ひが出来て、料金と引き換えに武器や退魔装備と

交換したりなんかをやつております

「あ……ああ。その関係なんだ」

そういえば彩が言っていたような気がする。

巔鳳にしている退魔道具を売っているところが近所にあると。
それはどうやらこの一人がやつてている神社だったようだ。

「貴方達は何者ですか？」

「魔法少女とその兄です」

「…………束の事をお聞きしますが魔法「少女」設定を押したのは貴
方ですか？」

「（）想像にお任せします」

その顔は腹黒モードの笑顔ではなく、シスコンモードの笑顔だっ
た。

真実はいつも一つ。俺は犯罪者を見る目つきで命の恩人練弥を見下した。

御剣兄妹の認識を一転、一転ぐらい改变したくらいの時間が経つ
た。

妹はともかく。曲者の兄が原因で俺はちょっと疲れていた。

彩が買った詳しいものは教えてくれなかつたが、冷静になつてみれば商売をしているのだから顧客情報の流出はダメに決まつていて。
どの辺りが退魔道具なのか、どんなアイテムがあるのかは聞かな
いが一応買わた物を総計しても特に危険なものは入つていないと
練弥は言つた。

今はその言葉を信用するしかない。俺の精神状態の安定の為に。

「（）の空間は出よつと思えば出られるんですね？」

さつきのおばさんはそう言つた。俺は帰りたいと強く願いながら行動していたつもりだ。

しかし、兄妹に会う今までここから出られてはいない。鍊弥は質問に對して首を縦に振つた。

「そうです。帰りたいと思えば帰れるに貴方は出られない。それは貴方が帰りたくないと思っているからでしょう？」

「帰りたいに決まってるじゃないですか。こんなところにつまでも居たくない」

「では理由がわかりません。首なしが貴方を引き止めようとしているのか。それとも別の何かが引きとめようとしているのか……ではないでしょうか？」

「別の何かって……」

「例えば田の前にいる『婦人とかね』

鍊弥が両手に銃を持った。俺も釣られて鍊弥の先を見る。

鍊弥のいう「『婦人』はいた。先程のおばさんだった。

俺を勇気付けてくれた優しいおばさん。そうだ。あの人の事を忘れていた。

どうやつて現れたかは知らないが、おばさんを連れて帰らなければと俺は思い、鍊弥の腕を掴んだ。

「ダメです！あの人には俺を助けてくれました！」

「怪異は人を助けませんよ。それは何かの間違いです

「どうして…？あの人だって生きてるかも知れないじゃないですか

！」

「撃つてみればわかります」

「撃つたら死んじゃ…」

ドンッ！

一発の銃弾がおばさんの胸を貫いた。

信じられないほど目を疑つた。何のためらいもなく生存の確率があろうと、う人間を撃つた。

る。 もとに此弾には「ノンシンカン」を持てて、ノントカンと共に撃ち緑に

ミサカノヒロシ - ミサカノヒロシ -

容赦なし。手加減なし。
慈悲なし。無駄玉もない。
位置も全て正確に致命傷を狙う。

そして、銃をぶつ放しながら彼は笑っていた。

おはさんは見事に蜂の巣になっていた。アーメの影絵を見るよ！」

ああ、完全に貫通したのか、と俺が静かに悟った時、激しく嘔吐した。

גַּעֲמָנָה

朝食は消化されてしまい出ては来なかつたが、とりあえず吐きた
かつた。

彼女が死んだ。完全に。アレは絶対に生きていらない。死んでいる。
人の死を初めて目にした俺はそのグロさに思わず參ってしまった
わけだ。

「俺、異世であつた人か怪異かわかんないものはとりあえず撃つて確かめる主義なんです」

「さい…あく！俺も撃たれてたつて事かよ！」

「あの時は忍ちゃんがいましたから。普通の人間に怪異かそうじやないかなんて区別つかないんですよねえ」

忍は怪異かそうでないかわかるのだろう。

忍がいなければ今頃俺は撃たれていたかもしねれない。

ここにいない彼女に感謝を捧げつつ、一行に反省せずにヘラヘラ笑っている男を一発殴つてやりたい。

「だからって！」

「大丈夫です。これは怪異っぽくなつて勘で撃つたんで

「勘？勘だけで人を殺したのかよ！！」

「アレは人じゃないですよ。人はあんな風に再生しません」

「再生！？」

見ればおばさんは立つていた。さつきと変わったところといえば身体の穴が消えたくらいか。

おばさんは静かに笑つていた。微笑んで俺達を見つめていた。何も言わずに。何事もなかつたかのように。

どうしておばさんはそれがありえないことだと気付かないのだろう。人は撃たれたら死んでしまうものなのに。おばさんは立つていた。

「おば…さん……？」

「正面に走れ！！」

カートリッジを入れ替えて練弥はまた撃つた。

鍊弥に言われた通り、俺は走った。

正確に言えば走られたといつのに近い。

俺を急かすように後ろからハンドガンの弾が迫っていたのだから走るしかない。

波女の髪を手を眞つて、走つ坂才こ寺

俺の全身を冷たい空気が刺した。

真冬の空の下。冷たい風が肌を刺した。

ひうやうじには町外れの大きな登り道路のど真ん中のようだ。空には星があり、月があった。眼下に望む町には明かりがついてる。

卷之三

「で……でられた……のか？」

恐かつた。奴等に追いかけられたのも恐かつたが、容赦なく人を殺す兄妹も十分に恐い。

けれど、助かつたのだ。逃げ切つた。帰ることができた事に俺は笑いが止まらなかつた。

ハハツハハツハハツハハツ

乾いた笑いが真夜中の道路に響く。

足を動かす事もできずにへたり込んだ俺は夜空を見つめながら笑つた。

今はもうちょっとそうしていたかった。やっと俺は助かつたのだから。

そんな安心をしていたからだろうか油断していた。
ここは道路のど真ん中で、まだ終わっていなかつた事を俺は知らなかつた。

しばらくそうしていろうちに車のエンジン音が聞こえた。
音からしてかなり大きなトラックのような車だろう。
このままでは危ないと俺は疲れる脚を何とか動かして移動しようと思つていた。
思つっていたのだが…。

「あ、あれ…動かない」

足が地面に縫いついたように動けなかつた。
音はどんどん迫つてくる。しかし、俺は動けない。
何故なら…。

「ヒツ」

俺の脚には複数の手があつた。

小さな子供の手が俺を逃がさないようガツチリと押さえつけていた。

トラックが目視できる距離に迫る。

あつ。これは死んだ。死亡フラグが立つてしまつた。

俺は危険が迫つて動けなくなつたネコのように固まつて、迫るトラックを見つめていた。

「要…止める…」

「心」

そんな中はつきりと聞こえた女性の声と応えた男の声。

一人の男がトラックの前に躍り出て、両手を出す。

トラックはブレーキをつけながらその腕にぶつかった。

トラックはそのまま男を30センチほど押したが、俺の前でちやんと止まつた。

畠山としている俺の前にやってきたのは白髪の少女。

セミロングくらいの長さの少女は一本の刀を抜くと俺の足回りを薙ぎ払う。

すると、手はいなくなり金縛りが解けた。

「今日も散歩か？晴智晴之」

「貴方は…」

「空巣町風紀委員委員長。神坂かぐや。君を逮捕する

「……はあ…？」

カシヤ。

遠い地にいるお母様。お父様。

俺の災難はまだまだ続きそうですね。

状況1　浮浪する少年？（後書き）

またちょっとオーバー…。

字数を減らした方がいいのかもしれない。

御剣兄妹：特に兄を書くのが楽しかったです。

誤字、脱字報告、感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4898z/>

空巣の風紀委員

2011年12月20日22時55分発行